

幼稚園教育の指導法と指導案についての研究

— 新教育課程を現場から考える —

米 倉 春 良

Studies in the Method of Guidance and Teaching Plans in Infants' School Education

— The New Course of Study as seen by Practising Teachers —

Haruyoshi YONEKURA

はじめに

研究の意図と方法

二十一世紀の日本を背負う青少年の育成を目指す教育は、如何にあるべきか。変動する世界情勢の中で、真剣且つ深刻に受止めなければならない問題である。近年我が国の高度技術に伴う高度成長は著しいものがある。こうした時代の変化に対応して生きて行くために、教育課程審議会の答申を受けてすでに出発したのが今回の新教育である。

幼稚園では、平成二年度よりすでに新教育要領による全面実施に入っているが、これからの幼稚園教育を考える時、どうしても改善の理由を述べる必要があろう。文部省は、「幼稚園教育要領改善の基本方針」(文2)の中で、要約すると次のように述べている。①旧幼稚園教育要領は、制定されて20年以上(25年ぶりの改定)が経過していること。②この間の社会変化が著しいこと。③自然とのふれ合いをはじめとした直接体験の減少したこと。④人間関係が希薄化したこと。⑤旧教育要領の解釈が極めて多様で、共通理解がなされていないこと。⑥今後の社会変化に対応する教育内容を考える必要のあることなどをあげている。

又、幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議は、「幼稚園教育の基本」(文1)として、①幼児の主体的な生活を中心に展開するものであること。②環境による教育であること。③幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じるものであること。④遊びを通した総合的な指導によるものであることをあげている。

「教育要領改善の基本」にしても、「幼稚園教育の基本」にしても、これらは今後の幼稚園教育の方向づけをしたものとして極めて重要なことである。要は、今後幼稚園の現場の教師一人一人が、どのように受け止め、具体化して指導して行くかにかかっていると思う。そこで、新幼稚園教育要領に示された「ねらい」や「内容」を達成するためには、どのような指導形態や指導法が望ましいか。指導法と具体的な指導案との関係など、幼児を取り巻く現場の実態をもとに考察を

加えることにした。

1. 保育指導法

(1) 指導形態

今、現場で共通理解がなされていないで、それぞれの概念規定をもって使われている言葉に、形態論と方法論に関するものがある。例えば「たて割保育」という言葉である。形態論から正しく言えば、「たて割指導形態」であろう。指導形態の分類の仕方にはいろいろ考えられると思うが、一般的には「一斉指導形態」「グループ別指導形態」「個別指導形態」であろう。そこで「たて割指導形態」は、「グループ別指導形態」の中に位置づけられるものであり、別な呼び方をすれば「異年齢別指導形態」とも言える。なぜならば、グループの中には、同年齢グループと異年齢グループが考えられるからである。

「たて割保育」の言葉を使う人の中には、形態論と方法論を混同して使用している人もいるし、同一概念で使っている人もいるようである。これらの人の保育の実際を見ると、形としては「たて割保育」になっているが、同一活動をさせ、同一の教材教具を与えて一斉指導をしているようである。

又、「自由保育」と呼ばれるものがある。形としてはいろいろなものがあるようである。保育内容を自由にするので自由保育、中には級のわくを外して園全体として保育するので自由保育など、多様である。特に新教育要領（文3）になって重視されて来た、園児の自発性・自主性を尊重する保育とか、遊びを中心にした保育とかが言われると、目新しさにとらわれて、形としてますます取り入れられてくるのではないかと思う。大切なことは、形と方法の結びつきを考えることが必要なのである。

(2) 指導法

教育は、形態・指導法と別個の成立はむつかしく、効果をあげることは期待できない。幼稚園の保育もそうである。指導法としては基本的に「一斉指導法」「グループ別指導法」「個別指導法」と指導形態とは同じと考えてよいであろう。ここに形態と指導法の関係がある。

そこで、今幼稚園で関心の高い「たて割保育」について考えて見ることにする。現在行われているものは、3歳児と4歳児、4歳児と5歳児のたて割が多い。たて割保育は、異年齢の園児が同一活動をし、同じ目的のためお互いに助け合い協力し合って、望ましい人間関係を育成することに意義がある。そこで教師は、

- 同一活動と言っても、年齢の差、それに伴う技能の差を考える。
- 段階的活動内容を園児一人一人に応じたものにする。
- 活動する中で、個人差・発達差を考え個人に合った援助や指導をする。
- 年長者の一方的活動にならないで、協力しあうよう配慮する。
- 年少者の活動が消極的活動にならないように、活動に参加させる。
- 多くの園児に、教師は積極的に働きかけ、人とのかかわりをもつ力を育成する。

などの、解決しなければならない問題があり、教師の教材研究、指導法の研究などが重要なかぎ

になってくる。

今一つの研究課題は、「自由保育」である。本来、幼稚園の保育は、幼児の主体的な生活を中心に展開されるものであろう。しかし、自由保育には解決しなければならない大きな問題がある。その一つは、

① 教師の指導力の問題

これまで、自由保育の良さは十分に認めながらも、実際実施するとなると教師自身の指導力に危惧の念が生じるのが常である。又、園児の主体的な活動は、保育する教師としての立場を意識過剰にさせる結果につながるようである。

② 教師の経験と管理力の問題

自由保育を掲げて運営する幼稚園は、その幼稚園なりの積み重ねた実績をもっている。その実績の上に、教師としての経験と研究をし、園児の保育に当たっている。とかく自由保育は園児の自由な行動につながりがちであるが、そこをうまく指導して行くには教師の園児に対する管理力が必要であるし、それは教師としての経験と管理力を身につける研究であらう。

③ 園の経営と園児数の問題

我が国の幼稚園の現状は、そのほとんどが30名前後の園児を1名の教師が担当しているが、欧米の先進国では、20名足らずの園児数に2・3名の教師が担当している。多くの園児を一人の教師で保育し、しかも自由保育と言う幼児の主体性を尊重する活動の中で、一人一人の特性を生かして、自発性・自主性を養うことは、理論的には成立しても、実際の上ではなかなか期待する効果をあげるのはむづかしい。

幼児の主体性を重んじる自由保育は、園児自身の活動や活動内容を、園児自身が選択して活動することになる。従って、それに対応できる教具教材（活動材料）を十分用意しておく必要があるし、数多くの材料を選択すること自体が創造力を伸ばすことになり、園児の活動を生き生きとしたものにする。こうした園の設備施設の充実も、自由保育にとっては重要な要素として考えられる。又、教師自身も園児の主体的な活動に備えて、教具教材の準備と指導計画の綿密さが必要であらう。

(3) 指導形態と指導法の考察

① 一斉保育（よこ割保育）とたて割保育と自由保育

「一斉保育」については、従来どの幼稚園でも行われて来たものであり、園の組織運営の上でも、実際指導の上でも、保育しやすい指導法として取り上げられて来た。その良さも欠点も十分知り尽くされたものであるが、端的に表現すれば、教師の指導計画を園児の興味・関心に乗せて、同一年齢の幼児に、同一活動をさせて、同一指導をして、同一目標を達成させる、とも言えるのではないだろうか。この指導方法は、指導の平易さと共に目標達成のためには効果ある指導法と言える。しかし、その反面では園児の自発性・自主性・自立性などが、指導にもよるが一般的には育ちにくいと言われる。それは教師中心の保育になりがちだからである。

「たて割保育」は、一斉保育の欠点を補う保育方法として有効なものである。ただ、実施している幼稚園の現状では、異年齢集団の形態を取りながら、一斉指導に近い保育をしているように感じられる。数多い園児を担当し、教師の指導力もさることながら、たて割保育を実施して効果を

あげるのは大変なことであるが、思い切って取り組むことが大切である。

「自由保育」は、今回の幼稚園教育要領改善の趣旨を生かすためにも、今後十分研究し取り組んで行く必要のある保育方法ではないかと考える。幼児が活動を主体的にとらえ、自発性・自主性を養うには最も適した保育方法と言えよう。ただ、指導する教師としては、自発性・自主性を育てるための自由保育でなくて、どこまでも幼児の主体的な活動を通して、自発性・自主性を養うのだという意識的保育をすることが重要である。そこからまた有効な指導方法が生まれるであろう。

② 総合保育

(ア) 総合保育の意義

一斉保育・たて割保育・自由保育を、指導形態と指導法の上から考察して来た。各保育方法には、それぞれの方法のもつ長所・短所が考えられるし、その長所・短所はその保育法がもつ独特なものもある。そこで、その各長所を生かす意味で総合保育の立場をとる方法が、現段階ではよいのではないかと考えている。一般的に言われる総合保育とは、(文8)幼稚園保育内容の領域のわくを外して、総合的に扱う意味に使われているようであるが、私の考える総合保育とは、“領域のわくを外し、活動によって指導形態・指導法を変えて保育する。”

と言ったものである。もちろん、この方法が幼稚園保育の最上の方法であるとは考えていない。私の勤務する幼稚園の組織・運営・教師の指導力と園児の実態から、現段階の保育方法として考えたもので、今後はこれをもとに研究を進め、改善して行きたいと思っている。

このような立場を取ったもう一つの理由は、当幼稚園は教員養成機関(幼稚園教諭)の短大付属幼稚園として、幼児教育の研究と学生の実習園としての使命をもっていることである。特に保育経験のない学生に、高度な指導技術を要する保育を実習させ理解させることよりも、一般的な保育指導を体験させ、実際保育の経験を経たうえで、自分自身の考える保育指導法を身につけさせた方がよいと考えるからである。

(イ) 総合保育の実施計画

幼児の主体的な活動を尊重しながら、各種の保育方法を駆使して毎日の保育をすることは容易なことではない。そこで、週を単位として日毎の保育方法の立場を取ることにした。具体的には、今のところ一斉保育の立場を基本にしながら、自由保育を週二回(水曜・土曜)とし、たて割保育については、園外保育・園行事にできるだけ取り入れて行く考えである。もちろん、学生の実習期間中は一斉保育に切り替え、実習の最後に各種の保育方法を観察させるつもりである。一見生ぬるい計画のようであるが、幼児が指導法に慣れ、教師の負担・指導力などを考え合わせながら、実態にそって漸次自由保育へと移行してゆく考えである。

2. 保育指導案

(1) 指導案の意義と考え方

指導案は、教師の学生・生徒・児童に対する指導計画であり、教師の指導する教材の目的・教材観・指導方法などが具体的に記述されたものであろう。指導案についてはいろいろな考え方があり、中には、指導案は教師が持つもので見せるものではない。したがって書く必要はないとい

う否定論もある。しかし、書く書かないは別として、教師が子どもを指導する場合に無計画であってはならないことは言うまでもない。まして、他人の指導を受ける立場の指導では、見る人、指導する人に自分の指導する立場を明確にする必要がある。そのための指導案であり、指導の内容を表現しなければ他人には理解できない。

幼稚園の指導案（保育案）は、こうした学校教育の指導案の流れをくんで書くようになったものであろう。学校にはいろいろな形式を持った指導案があり、盛られている内容もさまざまであるが、公立学校については、ある段階の機関で標準的に示したものがあるので、各学校ではそれをもとに工夫し、独自の指導案になっているが、基本的にはそう変わっていない。幼稚園については、そうした標準的なものがないので指導案の形式は尚更多い。特に、学校の「教材」に対して、幼稚園は「活動」である。幼児の発達段階に伴う活動内容はなかなかとらえにくく、それを表現するために各園ではいろいろな工夫がなされているのも指導案の多様化の原因の一つである。

今回の幼稚園教育要領改善の理由（文7）の中に、「幼児の主体的な活動（遊び）を中心に展開すること。保育内容（領域）に対する共通理解がなされていないこと。」とあるが、この際領域を学校の教科的とらえ方をせず、幼児の主体的な遊びを中心に展開させるための指導案はどうあればよいか。を考えることにした。

（2）指導計画と指導案

園児の保育に指導計画が必要なことは言うまでもない。幼稚園の指導計画には、次のようなものが考えられる。全体計画、年間計画（月案）、週計画案、日案がある。いずれの計画案も綿密な計画案ではなく、実際保育に使えるものではない。では実際に使える細密な計画を用意しておけばよいことになるが、幼児の自主的活動は発達の段階によって大きな違いがあり、諸条件や環境によっても違いが生まれ、あらかじめ予想して計画することはむづかしい。又、よい計画案があっても、それを計画にそって実施するならば、教師の計画にそった教師中心の保育をすることになるおそれがあり、それでは園児の自主的活動もできにくいし、自発心も自立心も養われがたいことになる。

こう考えて来ると、指導計画（文4・文8）は活動や活動内容の概要を示し、指導案は指導時期の幼児の実態をふまえて細かな計画を立案する必要がある。実施に当たっては、園児の実態をふまえながら興味・関心を予想して立案するのは当然のことであるが、最も大切なことは、教師の計画にこだわらず園児中心の活動の流れに乗って変更するだけの心組みが必要である。教師が幼児に対して行う活動の予想や興味・関心は、幼児の年齢が低ければ低いほどむづかしく、ものごとについて考える考え方に開きがある。幼稚園の指導計画や指導案は、多分に変更性をもつものであることを念頭において実際の保育に当たることが大切である。

（3）当園の旧指導案

「表1」は、これまでの指導案で、一見して、分かるように教師中心の指導案になっている。もちろん、教師中心の指導案だと言っても形式や表現の上でうかがえるのであって、活動の流れや活動の内容については、教師が園児の活動に対する興味・関心を十分に考えて立案し、指導に当たっては園児自身の活動に配慮するのは当然である。こうした旧指導案を、形式や表現の上でも

園児中心の指導案にし、実際の指導の上でも園児の十分な活動ができるように試みたものが新指導案である。

(4) 新指導案の考察

指導案は、幼稚園に限らず一単位時間の指導計画として考えられて来たが、幼児の幼稚園における生活は限られた時間帯の集まりというより、一連の流れの中での生活と考えた方が幼児の発達段階に合う。(文7)そこで保育指導を一日の生活としてとらえ、日案とすることにした。

「表2」は、昨年度当初に作成実施したものである。標題を「幼稚園〇歳児保育日案」としたが、一般的には「保育指導案」が多く、指導者名も「指導者」「保育者」とまちまちである。保育指導過程以前に盛られている内容についても、それぞれの理由があつていろいろなものがある。当園では、学生の実習が予定されていた関係もあつて、一斉保育を予想し、しかも今回の幼稚園教育要領改善の趣旨(文2・文3)を生かそうと試みた改定である。

主題名は「主な活動」としてそのまま残し、ねらいは今までの観点「技能面・社会面・安全面」を「心情・意欲・態度」を考慮して書くことにした。設定理由は、「活動の理由」とし、従前の「教材観」「幼児観」「指導観」をまとめて、「幼児観」として幼児の実態を捉えて書くことにした。そして新たに「活動観」を設けて、子どもたちの自発性や自主性を、活動や方法とからみ合わせて記入することにした。活動過程については、登園から降園までの一日を記入することにし、単位時間の保育を詳しく書くことにした。更に「準備」を「環境構成」と改めた。

こうした一部改定をしながら、今後更に研究を進め、改善を加えて行くことにした。

「表3」は、改善を加えて現在使用している指導案である。標題は、総合保育の立場をとったため、年齢を取って「幼稚園保育日案」とした。保育形態の構成については、「組」のところで具体的に表現することにした。活動名「主な活動」を取ったが理由はどうしても、教師自身が活動にこだわり、教師中心の流れに陥りがちになるからである。活動の「ねらい」はもちろんそのままであるが、それは保育する以上ねらいのない活動はあり得ないと考えたからである。更にねらいがあつて活動があるのではなく、活動することによってねらいが達成される幼児の実態から、「活動の理由」を「子どもの姿」として、幼児の実態をとらえた上で「ねらい」を考えることとし順序を入れ替えた。

活動過程の表現については、いろいろな試案が出されているようであるが、(文6・文7)どの試案を見ても、環境と援助という表現が多い。それは、今回の幼稚園教育要領の中で、実際の活動については、環境を中心に展開し、教師は指導的立場でなく、幼児の主体的活動を援助する立場を取っているからである。そこで、おおまかな時間設定をし、活動過程を「予想される子どもの活動と環境構成」「援助の観点及び配慮」とした。配慮をつけ加えた意味は、援助をどのような方法や対策とするのかを具体的に考えるためである。

活動の流れについては、園児の自主的・自発的活動を尊重していろいろな活動を図示して表現するよう工夫した。しかし、幼児の活動は多様性をもつことが考えられるので、個人の活動を重んじながら、主活動の流れにそうよう配慮することにした。要は、教師の指導力と管理力の問題であるので、今後の研究に期待したい。

【表1】 旧指導案

()領域 指導案()組 男児()名 女児()名 計()名

園長印		担任印		年 月 日 曜	指導者	⑩
主な活動	(幼児の立場) 年齢・実態、季節にあったものを選ぶ。 ……をする。とか。……をして遊ぶ。		ねらい	☆この点までは、全員が到達してほしい。理解できそうだという線をうち出す。 ○技能面 ○社会面 ○安全面 ねらいが何であるか。いつも知 っておいて、内容と結びつけて おくこと(幼児の立場)		
設定理由	○教材観 (指導する教材の内容を段階的に順序よく要点をはっきりうち出す) ○幼児観 (子どもたちの実態→体や心の実態、経験の有無、技能の程度などを書く) ○指導観 (教師の指導性を十分におりこんで、子どもたちの自発性や自主性をからみ合わせて記入する)					
時間配当	幼 児 の 活 動		指 導 の 配 慮 及 び 留 意 点			準 備
(導入) 10分	(幼児の立場から記入) ★主な活動へ導くための興味づけ、関連のあるもの		(教師の立場から記入) ×静かに椅子を運ばせる。			帽子 クレヨン 画用紙 (35枚) ピアノ 楽譜 (準備する 用具はすべて 記入のこと)
30分	白まるより1字下げて、黒まるをつける。 ⑩○ _____ ● _____ ● _____		×クレヨンを静かにとりに行かせる。			
40分	○準備運動をする。…………… ●首の運動をする。…………… (右, 左, 上下, 回す) ●跳躍をする。 (3拍子とび, 2拍子とび) ●とび越しをする。 (両足とび, 片足とび)		●間隔を十分に <u>とらせる</u> 。(線をそろえること) ●肩を動かさないように <u>させる</u> 。 ●極致まで十分 <u>行わせる</u> 。 ●調子よくリズムにあわせて <u>とばせる</u> 。 ●遠くまでとぶように <u>留意させる</u> 。 ●踏み切り板をはなして <u>使わせる</u> 。			
45分	(整理・反省) ★主な活動に対しての反省、整理、次時 予告や期待をもたせるもの		☆(語尾に注意して、教師の立場から書く)			
記事及び 反 省	○主な活動の教材が適切であったかどうか。 ○ねらいが達成されたかどうか。この面は良くできたが、このところは、こんなにした方がもっと良くなるのではないかと。… ○このような場に、このような処置をとったが、それが適切であったかどうか。 ○この次は、こんなふうにもっていった方が良いと思う、とか、全体的なことを書く。 幼児が { いっしょうけんめい、がんばった点 おもしろかったところ できた人 この次はどんなことをがんばろうと思うか 苦しかったところ できなかった人 } 等々					

【表2】 新指導案

幼稚園 4 歳児保育日案

平成 年 月 日 曜
組 保育者 印

主な活動	(幼児の立場) ……をする。 ……をして遊ぶ。 年齢・実態・季節にあったもの を選ぶ。	ねらい	(幼児の立場) ○心 情 ○意 欲 ○態 度 } を考慮して書く。
活 動 の 理 由	(教師の立場) ○幼児観 (子どもたちの実態→体や心の実態, 経験の有無, 興味・関心などを記入する。) ○活動観 (子どもたちの自発性や自主性を, 活動や方法とからみ合わせて記入する。)		
時間配当	予想される幼児の活動	活 動 上 の 配 慮 及 び 留 意 点	環 境 構 成
9 : 00	㊦ (幼児の立場から記入) ○登園する。	(教師の立場から記入)	楽譜 ピアノ
10 : 10	○朝の会に参加する。	●静かに椅子を運ばせる。	●音がしないように ●グループ別に ●口をしめて ●行儀の良い子から
10 : 20	○自由遊びをする。		
11 : 00	○準備運動をする。 ●首の運動をする。 (右・左・上下・回す) ●跳躍をする。 (3 拍子とび・2 拍子とび) ●とび越しをする。 (両足とび・片足とび) ★○(白まる)より1次下げて ●(黒まる)をつける。	●両腕を真横に広げ, 近くにいる子に当たらないよう間隔 を十分に開けさせる。 ●肩を動かさないように, 耳が肩につくくらい曲げさせる。 ●極致まで十分行わせる。 ●調子よくリズムに合わせてとぶように促す。 ●できるだけ遠くにとぶように, 上手な子供のとびかたを 見てどのようにしたら遠くまでとべるか考えさせる。 ●腕は前後に大きく振上げて, はずみをつけてとぶと, よ り遠くにとべることに気付かせる。 ★どのようにしたら活動をスムーズに進めていくことがで きるか, 具体的に記入する。	笛 マット 4 ビニールテープ フープ とび箱 準備する用具 環境構成をす べて記入する。
記 事 及 び 反 省	○主な活動が適切であったかどうか。 ○この面は良くできたが, このところはこんなにした方がもっと良くなるのではないか。 ○このような時に, このような処置をとったが, それが適切であったかどうか。 ○幼児の動き {興味をもって活動したか. 興味を示さなかった原因等}		

【表3】 現在使用している指導案

幼稚園 保育日案

平成 年 月 日 曜
組 保育者 印

子どもの姿	(教師の立場) ○活動観 (子どもたちの自発性や自主性を、具体的活動を通して記入する。) ○幼児観 (子どもたちの実態→体や心の実態、経験の有無、興味・関心などを記入する。)	
ねらい	(幼児の立場) ○(内容を含めてねらいを設定する。) ○(心情・意欲・態度を考慮して書く。)	
時間	予想される子どもの活動と環境構成	援助の観点及び配慮
9:00	<p>(幼児の立場)</p> <div><div>登園する</div><div>自由遊びをする</div><div>園庭で遊ぶ</div><div>室内で遊ぶ</div><div>リズムをする</div><div>リズムをする</div><div>歌をうたいながらリズムをする</div><div>歌をうたう</div><div>打楽器をならす</div><div>タンブリンのグループ</div><div>カスタネットのグループ</div><div>「山の音楽家」の楽器遊びをする</div><div>トライアングルのグループ</div></div> <div>遊具や用具を用意する</div> <div>レコードをならして雰囲気をつくる (カメンライダーブックなど)</div> <div>打楽器を用意する (タンブリン・カスタネット・トライアングルなど…)</div>	<p>(教師の立場)</p> <ul style="list-style-type: none">●持ち物を始末した子どもから順に遊ぶよう働きかけ、じぶんで遊びを選ぶようにする。●園庭で自由に遊んでいる子どもたちが室内遊びに興味を示すように言葉かけをする。●子どもの希望によってグループ分けをし、興味をもって練習させ教師は回って援助する。●使用したい楽器を自由に選ぶようにするが、争いにならぬよう、順序よく取らせる。●交替しながら何回か行い、片寄らないように声かけをする。
10:00		
11:30		
13:30		
13:50		
記事及び反省	<p>○活動に対する援助の仕方は適切であったかどうか。</p> <p>○このような時に、このような処置をとったが、それが適切であったかどうか。</p> <p>○この面は良くできたが、このところはこんなにした方がもっと良くなるのではないか。</p> <p>○幼児の動き {興味をもって活動したか。興味を示さなかった原因}</p>	

おわりに

未来に向かってはばたく幼児の育成にふさわしい、明るい生き生きとした幼稚園の保育は、現場の教師がいかにか今回の幼稚園教育要領を理解し、幼児のための保育を生かすかにかかっている。

環境による教育を基本とし、幼児の主体的な生活を重視しながら、自発性・自主性を養うことはすばらしいことである。このために、保育指導法・保育指導案はどうあればよいかを考えて来たが、理論の上では成立しても、実際の保育の場では諸条件がからみ困難な点が多い。幼児の自発性一つをとりあげても、自発性は自由につながり、自由は責任と義務の伴わない勝手気ままな行動になりがちである。それが子どもであり幼児である。自主性や主体性となれば尚更困難性がある。

だからと言って、手をこまねいていられないのが現場の教師である。今回改善された幼稚園教育の趣旨を踏まえながら、教育要領に示された基本や保育内容を生かすべく、懸命な努力をすることが大切である。新教育は無から有を生み出したものではない。文部省は、「幼稚園教育の本質に関する考え方は変わらない。教育内容の改善を図った。」と説明している。我々は、これまでに培われて来た幼稚園教育を基盤に、目新しさにとらわれず、幼児をとりまく園や地域や環境に対応していく柔軟性を考えながら、園児の保育に当たりたいと考えている。

参 考 文 献

- 1) 幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議 1986 幼稚園教育要領の在り方について
- 2) 文部省初等中等教育局幼稚園課 1988 幼稚園教育課程講習会説明資料
- 3) 文部省告示第23号 1989 幼稚園教育要領
- 4) 文部省 1989 幼稚園教育指導書
- 5) 全日本私立幼稚園連合会 1989 幼稚園教育要領理解のために
- 6) 河野重男 編著 1989 新しい幼稚園教育要領とその展開
- 7) 高橋一之・野角計宏・野村睦子・柴崎正行編著 1989 新幼稚園教育要領の解説
- 8) 文部省 1989 幼稚園教育指導書 増補版

(1990年 9 月30日受理)